令和５年度　日本史学科
学校推薦型選抜・特別選抜　小論文　出題の意図

問題文の出典：吉川真司「〈国風文化への招待〉」（『国風文化』岩波書店　２０２１年）
ｐ１～６及びｐ１３～１５より抜粋。

限られた時間の中で、出題された長文を読み解きながら自ら思考し、それを論理的に表現できているかを問うものである。

問１
1)　設問の趣旨を的確に捉えているか。
2)　課題の在所を把握し、適切に絞り込んでいるか。

問２
1)　具体例と関連させて説得力をもって論じているか。
2)　文章を整然とまとめ上げているか。

※　この「出題の意図」についての質問及び照会には、一切回答しません。

令和五年度　山形県立米沢女子短期大学　日本史学科

学校推薦型選抜・特別選抜　小論文　問題用紙

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

平安時代の中期おおむね一〇―一一世紀ころに発達した文化を「国風文化」と呼んでいる。国風文化という言葉を聞くと、すぐに平安貴族の優雅なくらしぶりが目に浮かんでくるだろう。寝殿造の邸宅で華やかな遊宴が行なわれ女房装束(いわゆる十二単)を着飾った女性たちが居並ぶさま。それは『源氏物語』や『枕草子』といった王朝文学に綴られ、いくつもの絵巻物に描かれている。そうした作品には平仮名が使われ、流れるような和様の書が美しさを添えた。平仮名は一〇世紀初めの『古今和歌集』のころには完成していて、それらの和歌は平安貴族たちの基本的な教養とされていた。(中略)

私たちは国風文化を当然のように知っていて、日本的な貴族文化」というイメージをもっている。それはなぜなのか。そう、学校で教わったからである。国風文化は中学校・高等学校の教科書で必ず記述されてきた。たとえば、次のように。

平安時代に入っても、遣唐使の派遣はしばしばあったから、依然として唐文化の影響は大きかった。しかし、航海には危険が多く、唐が衰えて文化を学ぶ必要も少なくなったので、宇多天皇の時代に遣唐使は停止された。このため、いままで摂取してきた大陸文化は日本人の生活によく融合・同化され、制度・宗教・文学、さらに美術・工芸に至るまで、いずれも日本独特の発達をとげた。したがって、平安時代の文化の著しい特色は、外来文化の醇化(純化して良いものにすること)と、国風文化の発達である。

これは一九三七年に発行された渡辺世祐『新制中学国史　上級用』(六盟館)の上巻「第五章　国風文化の発生」の一節を、今ふうの文章に改めたものである。このような記述は、さまざまな修正をほどこされながら、それから八〇年以上も中学・高校教科書に受けつがれ、生徒たちに国風文化の知識とイメージを与えてきた。しかし、平安中期の文化をひとまとめにして理解することは、おそらく近代になって始まった思考態度である。また、それに「国風文化」という言葉が与えられたのは、昭和に入ってからのことであった。(中略)

さきほど、一九三七年に渡辺世祐が書いた中学校教科書を紹介した。渡辺はその五年前、『新制国史上級用』(六盟館)という教科書でもほとんど同じことを述べていた。しかし、注目すべきことに、そこに「国風文化」という言葉は見えない。つまり、①一九三二年に「国民文化の発達」とあっさり書かれていた部分が、一九三七年になって「外来文化の醇化と、国風文化の発達」に改められたのである。その理由をさぐる前に、ひとつ確認しておきたい事実がある。かつては「国風文化」という言葉を使わなくとも、平安中期の文化がちゃんと説明されていたことである。「唐の影響を強く受けた文化から、日本独特の文化へと変わった」というふうに。このような考え方は、国風文化論の基本的な枠組みとして受けつがれていく。仮に〈古代文化変容論〉と名づけることにしよう。また、なぜ文化が変容したかという点については、ふつう三つの理由があげられてきた。すなわち、⑴唐との外交関係がなくなったこと、⑵平仮名が発達したこと、⑶藤原氏が繁栄したこと、の三点である。このうち⑴⑵は主として文学について、⑶は主として美術・信仰・生活について語られてきた。このように、国風文化論はまず〈古代文化変容論〉があったところに、「国風文化」という言葉が貼り付けられたものなのである。(中略)

一九三〇年代は軍国主義が高まり、国民の戦争動員が進められた時期であった。教育面では三五年に教学刷新評議会が設置され、翌年、「国体（注1）・日本精神の真義に基づく教学の内容の刷新」を答申した。そこには「久しく我が国文化の中にあって我が国風に醇化せられたる東洋教学・東洋文化」を振興することや、「国史を貫く精神を闡明（注2）」することが盛り込まれていた。三七年の「中学校教授要目」はこれに基づいて、指導内容を詳しく定めたものであ る。そもそも「国風文化」という言葉は、一九三〇年に川上多助が初めて用いたものらしいが、文部省がそれを採ったとは限らない。むしろ、教学刷新評議会答申に「我が国風」という言いまわしが三回も見えるので、こちらを意識した可能性がある。いずれにせよ、「国風文

化」が中学校教科書に出現したとき、その語には「国体・日本精神」のイデオロギー（**注3**）がまとわりついていた。やがて四〇年代に入ると、教科書以外の歴史書にも「国風文化」の語が広まっていった。

一九四五年、アジア・太平洋戦争が終わった。「国風文化」は戦時体制期の文部省が採用・強制し、国体論的文脈に落とし込んだ言葉だったから、戦後は忌避（きひ）されそうなものだったが、実際にはそうならなかった。（中略）

一九七〇年代、ちょうど高度成長が終わるころから、通説的な国風文化論への批判があいつぎ、理解の刷新がはかられていった。（中略）

先駆けとなったのは村井康彦である。彼は、遣唐使が廃止されても中国文物は輸入されており、唐文化から離脱したとか、影響が稀薄化したとは言えないと考えた。また、九世紀の「国風暗黒時代」にもハレ（非日常）の場の漢詩、ケ（日常）の場の和歌という共存があり、そこから和歌が成長していくのは、漢詩の影響をうけ、平安京の都市化によって生まれた「雅（みやび）」の現われだとした。（中略）

これをうけ、一九九〇年代には新しい国風文化論が登場する。まず注目されるのが、榎本淳一の研究である。彼は、中国海商（かいしょう）の役割を大きく評価する。唐との国交がなくなっても、海商のおかげで中国文物の輸入量が増えた。その結果、漢籍が広まり、その刺激を受けて仮名文学も発展した。中国文物は平安貴族の美意識にも影響をおよぼし、こうして国風文化が成立した、と述べたのである。これはどう見ても、村井説を「中国文物の大量摂取」という一点から尖鋭化させた考え方である。その後、日本文学研究者の河添房江が議論を受けつぎ、西本昌弘が実証面で補完を試みたこともあり、榎本流の考え方は有力なものとなってきた。

しかし、榎本とはかなり違った理解も示されている。その基盤となったのが、やはり一九九〇年代に発表された美術史研究者・千野香織（ちの）の研究である。彼女が明らかにしたのは、〈唐〉と〈和〉が並立する構造であった。〈唐〉は中国的なもの、〈和〉は日本的なもの。国風文化ではこの両方が重んじられたが、単純に並立するのではない。〈唐〉は公・ハレ・男性性、〈和〉は私・ケ・女性性と結びつき、二項対立的な文化コード（**注4**）が機能したと述べる。これまた村井説の発展形と言えようが、千野はジェンダー論に立脚しつつ、絵画・文字・建築から具体的に論を展開したのである。

千野説は、国風文化では〈唐〉規範性が薄まり、〈和〉が生活に密着した文化要素として浮上した、と読むことができる。二〇一〇年前後から高まった榎本説への批判は、輸入文物を過大評価することを否定するとともに、千野の議論をいっそう深化させようとするものだった。（中略）

実証的研究が進んだ現在、国風文化論はかえって混沌としてきたかに見える。しかし、榎本説をとるにせよ、とらないにせよ、確実に言えることがひとつある。それは、②国風文化には〈唐〉と〈和〉の双方がしっかり組み込まれていた、ということである。「日本独自」の文化要素ばかりを評価するのは正しくない—明治以来の国風文化論を刷新する試みは、このような認識にたどり着いた。

（吉川真司「〈国風文化〉への招待」、『国風文化』、岩波書店　二〇二一年所収、を一部改変）

注1国体…天皇が君臨・統治する国家体制。
注2闡明…はっきりと明らかにする。
注3イデオロギー…政治思想や社会思想。
注4コード…規定。

［設問一］傍線部①のように、一九三〇年代に現れた「国風文化」という語が、間もなく教科書やその他の歴史書に浸透した理由を、八〇～一〇〇字で説明しなさい。

［設問二］傍線部②からは、一面的な国風文化の見方・評価に対する批判がうかがえる。国風文化を「日本独自」の文化要素のみから評価することに限らず、様々な事柄や人物がしばしば一面的な見方・評価をされることがあるが、あなたはこれについてどう考えるか。具体的な事例をあげながら八〇～九〇字で述べなさい（事例は、歴史上の事例でも身近な事例でもよい）。